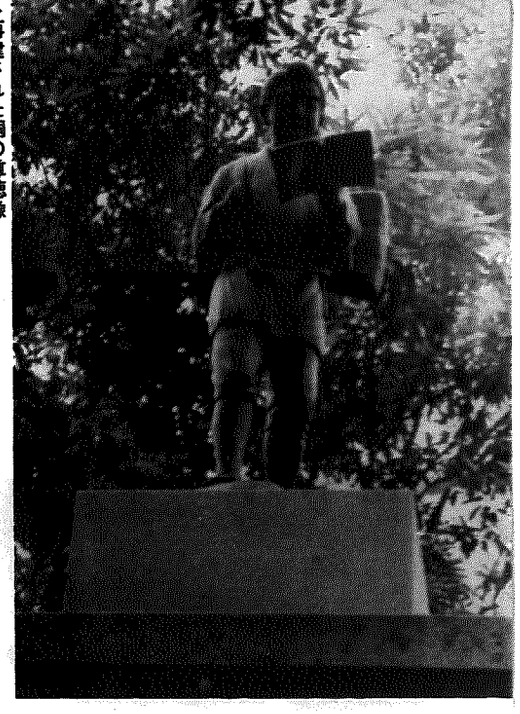
再び建つ
――昔の姿、とりもどす――


▶再建された銅の尊徳像

七月二十三日、木場小学校門前に「銅」の尊徳像が再建されました。
この銅像は、戦争で供出されて、以来、三十八年ぶりに、木場の人たちの念願がかなったものです。

尊徳像除幕式

木場小学校の校門前にある二宮尊徳像が、陶像から銅像に建て替えられ、七月二十三日(木)、除幕式が行われました。

除幕式には、浅妻町長、武田県議をはじめ多数の来賓と、木場小五、六年の児童、木場部落の人々が出席し、銅像は児童代表の山際直樹君と山際涼子さん、石川久蔵木場公民館分館長、加藤信吉木場総代の四人の手で除幕されました。

続いて、来賓の方がたのあいさつがあり、児童の山際泰史君が尊徳の作文を読みあげ、式を終了しました。

昭和十一年に最初の銅像を建立

木場小学校に尊徳像が建てられたのは、昭和十一年の七月二十三日。昭和初期、※1米価の暴落と※2激しい政争で黒埼村は貧窮のどん底にあり、地主から小作農まで借財がないという家はほとんどない有様で、村でも学校教員に給料が払えないほどでした。また、政府の経済更生の指定村を受けようにも、「黒埼のような政争の激しい村は指定を受ける資格がない」ということで、八方ふさがりの状態でした。

この窮地を救う為に取り入れられたのが、※3二宮尊徳の教えに基づいた、「※4報徳」でした。

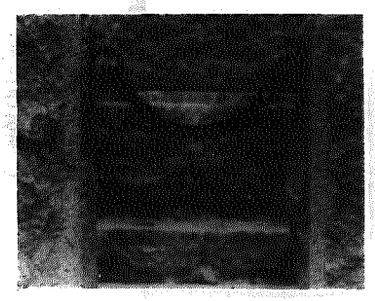
報徳運動は、政友会の※5宗村卯市と憲政会の※6渡辺平治郎の両氏によって推進され、長く続いた政争も治まり、膨大な負債も整理され、黒埼村はようやく更生したのでした。この記念に建てられたのが、尊徳像なのです。

銅像から陶像へ

尊徳像建立の翌昭和十二年、日本は中国に侵略を始め、※7日中戦争になり、どろ沼状態のまま昭和十六年太平洋戦争が始まりました。

太平洋戦争は、莫大な物資を消耗し、尊徳像は銅製だった為に昭和十七年秋に※8供出されてしまいました。その代わりに、翌昭和十八年の四月、陶器の尊徳像が建てられ、以来三十八年間銅像の代役を果たし続けていたのです。

なお、報徳運動も戦争や内政圧迫で宗村、渡辺両氏をはじめとする指導者の転任や応召で下火となっていきました。


◀台座のチェーンも新しく

昭和五十六年 銅像再建

最初の銅像は、木場部落の人々や木場小学校の児童の献身的な※9寄附や協力で建てられましたが、中心となって、働き奔走したのは柏直吉さん（木場新田）でした。

柏さんは、戦後なんとか銅像に再び建て替えたいと考えていましたが、その機会なくいつしか部落の人も忘れていき、尊徳像は時代の流れに埋没したのです。

五年程前、柏さんは新聞紙上に「木場の尊徳像は貧弱である」という一文を見ました。そして、銅像再建に向けて一日百円貯金を始めたのです。

これがきっかけとなり、石川久

銅の尊徳像

▲喜びの除幕式

蔵木場公民館分館長らが昨年七月ごろから部落の人に協力を求め、今年五月から寄附金を集めることになりました。

当初、再建費用として百万円を目標としてましたが、部落の人人の温かい援助で予想をはるかに上回って百五十万円が集まりました。

そして、銅像の製作は前像と同じく富山県高岡市の広野銅器店、据え着け工事も同じく大野の渡辺石材店に依頼し、除幕式も同じ七月二十三日にすることになりました。

このように、新しい銅像は、前像と深い因縁をもっています。

石川久蔵さんは、「村の人のみなさんからお金を出してもらって再建できたことが、一番有意義なことだと思います。」と言ってます。

また、除幕式の後に記念講演会がもたれ、戦前　渡辺、宗村両氏に報徳を教えられた前静岡大学教授の加藤仁平氏が演壇に立たれました。

このように、尊徳像には昭和の歴史の流れを見ることができるのです。

注釈

※1　米価の暴落
昭和五年、一俵十円以上であった農林一号は四円八十銭に下落。また、昭和四年に一貫月八円の繭は昭和五年に五円台に下落した。

※2　激しい政争
黒埼村は、明治三十四年の板井、木場、金巻（大野）、黒鳥、鳥原の合併以来、水利問題で各部落が対立し、中央政界に呼応して政友会、憲政会の二派に分かれた政争で混乱した。区長も青年会長も二人で、選挙の時には嫁婿は一時的に離縁するという程であった。昭和七年六月二十五日の村会議員の選挙では投票人一千七百五十八人に対し、投票数が二千二百二十一票もあるという有様であった。

※3　二宮尊徳
本名二宮金次郎（一七八七―一八五六）江戸時代末期の農政家で当時の農村を指導した。

※4　報徳
二宮尊徳の思想を大系化したもの。天地の恵みに感謝し倹約を説く。昭和の初めから全国的に広まる。

※5　宗村卯一
大野出身。故人。当時役場職員で政友会のリーダーであった。戦中、県庁に引き抜かれる。

※6　渡辺平治郎
木場出身、故人。当時村会議員で憲政会のリーダー。戦中の政党弾圧の為、長岡市へ転出する。

※7　日中戦争
昭和六年の満州事変後、日中関係は緊迫の一途をたどり、昭和十二年七月に蘆溝橋事件が起こり、全面戦争となった。昭和二十年の日本の降状まで十五年間、日本は中国で戦争を続けた。

※8　供出
戦事中、子供の弁当箱から寺のつり鐘まで、金属性物資を強制的に提出させられた。

※9　寄附
各家が、米一弁から二升、児童は一銭ずつであった。

尊徳先生のこと

山際　泰史（やすし）
木場小六年

今までは、二宮金次郎のことは、特に関心がありませんでした。四年の時、図書で二宮金次郎を読んで、学校の校門の所にある金次郎はこんな人だったのか、とはじめてわかりました。

ぼくは、金次郎の銅像は本物だとばかり思っていたけれど、銅像の立て直しのことを聞いて、本物じゃないということがわかりました。銅像の金次郎のポーズは、往復八キロメートルの山までたき木取りに行きます。それをせおって「大学」というむずかしい本を読みながら、一日二往復した時のものです。金次郎が子供の時からくろうしても、勉強ずきだったことがよくわかりました。

金次郎の村には酒匂川という川があって、その川のこう水のため田畑があらされました。それをもとにもどすために七年もかけた、金次郎のお父さんは病気になり死んでしまいました。お母さんも金次郎が十五の時になくなりました。それからは、二人の弟と別れておじいさんの家へあずけられました。

そこでも金次郎はよくはたらき、ひまさえあればむずかしい本を読んでいました。

大人になってからの金次郎は自分が経験したり、気づいたこと、学んだことを実行してりっぱに成功しました。そして、小さいことでも積み重ねていけば、しまいには大きなことも成しとげられることを人々に教え導きました。

尊徳先生とよばれ六十九歳でなくなる最後まで、多くの人々のくらしをよくするために力をつくし、ま心の大切さをさとしました。

昭和のはじめのころ、ぼくたちの村が大へん困っていた時に、尊徳先生の教えが役立って、村が立派に立ち直ったということを先生から聞きました。

近ごろの人は、人のためより自分のそんとくしか考えない。と言っていたのをテレビで聞いたことがあります。ぼくもそうだと思います。金次郎まではしなくても、ほんの少しくらいでもいいから、人のためにつくすということを考えなければならないと思います。

今度、みんなの力で新しく生まれかわった銅像が、校門の所からぼくたちのことを見守ってはげましているように感じます。新しい銅像の立てかえを、ぼくたちもいっしょに喜びたいと思います。